

少女の身体から飛び散る、内なる悲鳴

die pratze dance festival ダンスが見たい!7
オトギノマキコ 「脱臼するメルヘンは内側のテトリス」
7月18日・19日 麻布 die pratze



撮影/田中英世
「ダンスがみたい！」で、思いがけず見知らぬ素晴らしい踊り手と出会った。

階段をそっと降りてきて、そのままコツンと骨が床にあたる音を立て座り込む。少し湿ったコツンという硬い音が、音のない広い空間に響く心地よさと奇妙さにゾクッとする。オトギノマキコのソロは、そんな忘れられないシーンから始まった。そしてそのまま、慣性で動かされるかのように、上体が静かに前に倒れ、頭が床

に触れ、お尻が突き出て、小刻みに揺れる足が壁をつたう。縮こまつた小動物が壁際でもがいているかのような、得体のしれない動き。ゆっくりと身体が旋回しつつ、ふたつのひらが何かをいつくしむかのように斜めに差し出され、上体が起きあがるが、ふたつの足は内側へと捻られている。小さな花の刺繡のある白のブラウスに黒のスカート、少女といった姿の彼女の身体は、つねにどこかが捻れている。細く長い指は、昆虫の触角のように何かを探るのか、一本一本が勝手に動きまわり返る。足の指も上方に捻れ返しながら震え、気づくと眼も二の腕もいつのまにか別の表情でそこにある。いわゆる人形振りが、外からの力によって四肢が動いているかの如く裝う意匠であるとしたら、彼女の動きはあくまで内部からの力によって身体の各部を「脱臼」させて、そこにいくつもの小さな生き物を住まわせるかのようだ。くずおれながら無数のものがわきあがってくるその動きは、彼女が学んだというアルトー館の及川廣信から流れ込んだものなのだろうか。あるいは遠く、「私の体が破片になつて飛び散り無数の側面をあらわし……」と叫ぶアルトーの声がそこに響いているのかもしれない。

オトギノマキコは物と戯れる。半分ほど水の入ったミキサー、そこにサクマのドロップを無造作に放り込む、バラバラと床にこぼれ落ちるのもおかまいなしに。硬いドロップでミキサーの歯が痛まないかといふ心配もおかまいなしにスイッチを入れると、鈍い音でドロップは砕かれてゆく。唸りを立てるミキサーを放つておいて彼女は再び踊り始める。ミキサーの持続的な攪拌音

◆ J演劇とは何か?

現代日本の新しい演劇動向を批評的に総括する「J演劇」(Jはジャパン、ジャンクのJ)という概念。その提唱者で、本紙の寄稿者としてもお馴染みの内野儀さんの公開レクチャーが行われる。舞台公演のビデオ映像を用いて「J演劇」の現在を語る。注目。

9月13日(火) 10:00 ~ 11:30 東京国際芸術見本市 東京国際フォーラム ホールD1

のなかに微細なリズムを聴き取るかのように、彼女の身体は繊細な触覚となって揺らめいてゆく。手の指と足の指がピクピクと反り返り、その動きが上体をねじ曲げて、両腕が床に垂直になるまでに広がる。その伸びきった緊張がクッと断ち切れるようにして両腕は背中へ折れ曲がる。内部のノイズをその末端へと誘導して、脱臼するまで耐えるかのような身体。ミキサーのノイズに混じって、聞こえない音が聞こえてくるような瞬間だ。

オトギノマキコはハツカネズミと暮らしているらしい。「風の谷のナウシカ」を歌いながら虫愛する姫君となってひとしきりその白くて小さな生き物と戯れる。舞台を照らす強い光に、感いきみのネズミ。床に四枚の色紙を敷いてネズミを載せ、食卓で用いるようなハエよけネットをかぶせてしまう。そしてまたネズミをそのまま放つておいて彼女は踊り始める。ネズミはネットの隅でゴソゴソ動いている。彼女は壁際で壁に骨をぶつけながら蠢いている。そしてまた骨がコツンと床にあたる音。小動物のように折りたたまれてゆく彼女の動き。ネズミの動きが不可解なのは人間としての主体性を投影できないからなのだろうが、彼女の動きもまた投影という他者による搾取を寄せつけずに、不可解なボリフオニーを奏でる機械のように聞こえない音を立てている。

素っ気なさというのだろうか、ミキサーもネズミも、少しばかり遊んだあとは「勝手にしていてね」とでも言うかのように放つておられる。それでながら彼女の動きに寄り添い、彼女の動きを補完するようにそこに存在している。奇妙にも親密な交感の時を覗いてしまったようなさわめきを感じた。

ギャラリーやライブハウスで踊ることの多いという彼女にしてみれば、殺風景な劇場で踊ることは居心地の悪いものなのかもしれないが、アルトーと、それが細い糸であろうとも結ばれているオトギノマキコに、少々閉塞気味の劇場という空間を内側から脱臼させてもらいたい。

坂口勝彦

当世の地獄を潜る、恨憤の全体演劇。 汚泥と生木の森に肉体が炸裂し嘘と 恥辱の歌が響く。Alice Festival 2005

ゴキブリコンビナート
『君のオリモノはレモンの匂い』
8月11日~14日 タイニイアリス

タイニイアリスの階段を降りるとチョロチョロと水音が聞こえる。「おー水か! どんな空間なのだろう」と期待しながら劇場の中に入つて、のけぞつた。劇場全体を、樹木のジャングルジムのような構造が埋め尽くしている。密林。天井からは一條の水が落ち続け、床は湿地帯のような全面のプール。観客は樹皮がついたまま曲がりくねる生木をくぐり、水の縁や一段高くなつた空間の余白に居場所を確保して開演を待つ。

本物の木と流れる水の空間は神秘的でさえある。「伝説の楽園、シャンバラの密林か?」などと思ううち、開演。結婚式の装束のまま現れた新婚夫婦のチュエットによってここがなんと!「支笏洞爺国立公園」であ

ることが告げられ、舞台は一気に疾風怒濤の展開。台詞は、全編を通し止むことのない歌として綴られる。

新婚旅行にここを選んでしまつたことを後悔する花嫁と花婿を森の民が襲い、開演数分にして花嫁花婿ともほとんど全裸に…。「樹木のジャングル」の3次元空間を入り乱れ、泥水を飛ばして池を走り回る俳優たち。やがて「お!宿のおばさん」という歌とともに和服に提灯をさげた出産の老婆が現れ彼らを救出し、主人公のカップル、魅魔魍魎の跋扈する森、襲い攻撃する森の民、シェルターとしての宿とおばさんというこのステージの基本構造が提示される。

平成生まれの小学生のいじめにより花嫁がロリコンの用務員であることが暴露され、花嫁は裏切られ森の民に渡される。襲われる花嫁。森の民の内部抗争。



撮影/青木 司
森の民の息子の天才音楽少年。実は朝鮮人であった父親の、両班によって虐げられた過去。外人の音楽教師。森の商品経済の鍵となつてゐるらしい赤いキノコと森にされる族のリーダー。キノコの消費者であるクラブの客。奴隸になりながら森の民を支配するような花嫁。犯され腹を割かれ内蔵を引きずり出され、裸にされ逆さにつられ性器から液体を噴出する花嫁。宿のおばさんとの汚物の放出合戦…。チェーンソーや斧を抱えた俳優がジャングルを飛び回る。掛け合い、



やソロが入り組む、複雑な構成の単純な旋律の歌の応酬。遠だらけ泥水まみれの裸体。人工女性器をつけて逆さ吊りにされて歌う女優…圧倒されるうち、気がついたら水の中に倒れた花嫁が花嫁の生首を抱えて横たわり、ステージは大団円を迎えていた。

この世でいちばんカッ飛んだような舞台なのだが、めくるめく展開の物語は意外にも、律儀なまでに筋を踏み、ひとつひとつのエピソードは徹底的に関連付けられている。たとえば花嫁の包帯は、花嫁が別れを告げようとしたデートでビルから落ちてきた鉄骨から彼をかばって出来た傷であること。それによって花嫁は情にはだされ不承不承の結婚に。しかし彼はロリコンで…というように舞台上の全ての記号は舞台上の「事実」に執拗なまでに連鎖する。いじめ、金儲け、裏切り、フェティッシュで未成熟な新郎、悪辣非道な収奪、暴力、ドラッグ、セックス、父の愛、朝鮮人…ランダムなエピソードが一気にくられ、裂かれた腹から引きずり出される「臓物」のように繋がって展開されるのだ。作者はエピソードのどれかに執着しているのではなく、



その連鎖にこそこだわっているように思える。猥褻に、無慈悲に積層する現代の「はらわた」を引きずりながら一気に走り抜けていく舞台なのだ。象徴性や叙情性によって断章をコラージュするような構成ではなく、

チネーの劇場を出たら、おりしもゲイフェスティバル真只中の新宿2丁目だった。

前嶋知明

俳優の実体ではなく、じつは間(タイミング)を観ているだけ。類例は多いが、これは本当に演劇なのか?

M&Oplaysプロデュース『アイスクリームマン』(作・演出:岩松了)

5月11日(水)~29日(日)

岩松了3本連続公演・第1弾として下北沢ザ・スズナリで上演された、岩松了作・演出による『アイスクリームマン』は、戯曲だけ読むといさか平板な印象を受けもする「言葉」が、舞台上でビジュアル化されることで生氣を帯びてみえてくる会話劇であった。

これは私的な印象にとどまるのか判断がつかないが、今日、岩松了の芝居を「よく見る」のはとても困難である、という点は、あらかじめ考えておくべきことのように思われる。逆に言えば、岩松芝居をうまく楽しむような見方(解釈組み)は、現在演劇シーンにおいて作動していないように思われる(そのことと『アイスクリームマン』という舞台成果の評価とは別に考えたい)。例えば、一時期喧伝されたように「静かな演劇」としてみようとするならば、確かに自動車免許合宿所ロビーという「場」の設定などはそれらしくもあるのだが、幕が明けた途端繰り広げられる声量と動きのうるささが目耳につくのは間違いないし、逆に80年代風かといえば物語にしても人物配置に見事なまでに脱中心化されており、かといっていわゆる「商業演劇」や「新劇」のようなフォルムへの依存は微塵もみられない。だから、客席からは笑いが起き、息を呑むシーンも多々あり、あるいは口当ての俳優が見られればそれでよいという雰囲気も少なから

ず漂っていたのだが、どのような角度からみるにせよ、今回の『アイスクリームマン』総体から安定した満足感を得ることはおそらく難しいに違いない。端的に、どうみたら楽しいのか分からず、解釈組みが舞台それ自体から提供されることもなく、雑多といつてよいほどに場面ごとの演出コンセプトが異なる舞台を前にするうちに、ようやくこれは「喜劇」、しかもチエーホフの登場人物のようなパーソナリティをもつ人々が織りなす「喜劇」なのだと想到する。

『アイスクリームマン』に限らず、岩松戯曲の登場人物達は、極めて「人間」的である。あるいは、「人間」的でありすぎるといつてもよく、しかも舞台表現において「演劇」的である。「いろんな人間がいるってこったよ、世の中には……」という吉田の台詞が示唆するように、『アイスクリームマン』では20人を越えるキャストが舞台を所狭しと行き来しながら、各人がその台詞を通して自らの妄想的な「世界」を語り続け、そうした人々の行き交う場において「成立」しているかのような会話の数々は、その実、場の力学や他人との関係性とは無縁の拠点から発されている。これは、情念や暴力が過剰なまでに噴出する際、そこに至る因果関係やプロセスが殆ど描かれないと根を等しくする。しかも、こうして舞台上で不可解な

ものとして捉えられようとする「人間」は、「新劇」型リアリズムや「静かな演劇」型のリアルとはおよそ対極の身体意識によって「喜劇」として、明確に見せ物として演じられる。だから、台詞や笑い(苦笑)や居心地の悪い雰囲気が作られ、壊され、空間が動いていく時、勝手放題な「人間」達を制御するのは、見世物 = 「喜劇」の中核を成す「間」 = タイミングに他ならない。岩松了作・演出『アイスクリームマン』においては、物語上の関係はおろか、舞台上の身体同士の関係よりも何よりも、それらが複数の要素が1つの場で交錯する「間」 = タイミングとその焦点化こそ(だけ)が命なのだ。

ただし、岩松了が俳優(の身体)を通じて現出されていく「間」 = タイミングとはTVを介してお茶の間に流通したものとはいさか趣を異にする。それは、自分の置かれた状況を痛いほど自覚し、そうした外部と自身のパーソナリティを関数として、個性的な歪みを経て言動を表出させていくタイプの登場人物達が、「喜劇」を構成するための「間」 = タイミングなのである。結じて、場面ごとに雑多ともいえる相貌をみせる『アイスクリームマン』とは、観客を前にした舞台上での「間」 = タイミングを支点として創られた「喜劇」であり、そこには「劇」としてトレースされた「人間」が描き出されているのであった。

松本和也／日本近代文学・演劇

IN TOWN

場所とは何か?

- 8月某日、瀬戸内海に浮かぶ犬島で行われたイベント「犬島時間」へ行く。3年前、「維新派」が行った演劇の舞台だったこの島は、一応、岡山市というくらいだが、船に乗らないとたどりつかない、本当の島。「犬島時間」は、島に点在するスペースを展示場所として、展覧会を行っている。メイン会場の「岡山市立犬島自然の家」にある福井一尊らの立体、絵画作品が置いてある。目の前に見える海とは逆に、島の中にある集落をたどる。旧



域の人との交流だけでなく、その場所でなければ作れない・見ることのできない作品を置くべきである。展覧会とはなにか、場所とはなにか、ということを改めて考えることができた。(藤川千彩)

「犬島時間」2005年7月30日~8月7日

郵便局や民家には、島を意識した青地大輔の写真や中野由紀子のガラスといった作品が並べられている。「サイトスペシフィック」という言葉があるが、「犬島時間」では、別に犬島まで行かなくても、という感じが拭えなかった。こうした「場所」に特化した展覧会では、地

告知

「クレージー・ホース ラコタの月」

北米大陸の先住民族であるコマンチやシャイアンが、合衆国政府と死闘を繰り広げた19世紀半ば、ラコタ(通称オグララ・スー族)には「狂える馬」すなわちクレージー・ホースがいた。今宵、ラコタ族の呪法により伝説の英雄が蘇り、生きる道を見失った現代の先住民女性を、ラコタの宇宙へ導く。ラコタの神秘的な伝統的歌舞と日本の能が出会いながら、大自然との共生を静かに感動的に歌いあげる。先住民族ラコタの呪術的ダンスが心を深く揺さぶる。

●両国 シアターX (kai)

9月9日(金)~11日(日)

料金: 4,000円(前売り)

問 タイニイアリス

Tel & Fax: 03-3354-7307

tokyo@tinyalice.net



Alice Festival 2005 (8月11日～2006年2月19日) 開催中。9月のプログラムから。

ダメ恋愛から抜け出せない
ダメ女たちの心をえぐる、
大衆演劇風超ド派手若手集団だ。

仏団観音びらき(大阪)「女殺駄目男地獄」
◎9/12(月)～14(水)

昨年に続いて二度目のアリス登場のこの劇団だが、
今回は誘われてアリスフェスに初登場となる。

「自虐的ナンセンスコメディを追求する」というように元気印の女優さんたちを中心に、ほとんど素舞台の板の上を自由自在に駆け巡る彼女たちの衣装もメークも派手派手コテコテ。それもそのはず大阪からの若い劇団なのだ。日舞あり大芝居ありお笑いありの身体を使った舞台は、いま流行りの大衆演劇風味を持った数少ない劇団のひとつで、今回はどんな新ワザを見てくれるか大いに期待したい。その新作は、人気漫画家の倉田真由美の代表作「だめんずうお一かー」で、その存在を知られた「だめんず」(ヒモ、暴力男、浮気男などに代表されるダメ男のこと)にはまる女たちの心理に切り込み、ダメ恋愛から抜け出せないダメ女たちの心の傷をえぐりだしていく。これ

から、日本全国に仏団南をばら撒いていくと、張り切っている彼女たちに注目だ。

朝鮮高校女子バレー部での事件を題材に、在日の見えざる「分断線」を照射する実力派。

劇団アランサムセ(東京)「アベ博士の心電図」
◎9/16(金)～19(月)

この数年、すっかりアリスフェスの常連となっているアランサムセは、在日朝鮮人だけで構成する劇団としてもその人気を定着させている。在日の同胞たち共通の痛みや悩みを題材に座付き作家の朴成徳が書き下ろす台本は、在日に限らず我々日本人の胸に強烈に響く優しさ切なさに溢れている。ともすれば暗くなりがちな題材を扱うが、そこを演出家で役者でもある金正浩が、笑いあり涙ありのエンタテインメントな舞台に仕立て上げる今回の新作は、1990年に大阪の朝鮮高校女子バレー部が、府大会に参加を認められながら、予選途中で大阪府の高校体育連盟が、学校側に辞退を強制したという実際の事件を元に、在日の見えざる「分断線」を描き出す。物語は、人工心臓を作り出し、生命工学の第一人者となったアベ博士が主人公。彼が人間の本質的な支配を目指し

取り組み始めたのが「人工脳」の研究。記憶を失くした青年の過去を新たに書き換えるべく、博士はある計画

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

を進行させていくが…。結成17年目を迎えたアランサムセの底力に期待したい。

奏でる音楽が言葉となり
パフォーマーの動きが物語る。
サブカル+シェイクスピアで刺激炸裂!

Afro13 「Death of a Samurai」

◎9/22(木)～25(日)

言葉ではなく、五感を刺激する作品を作り続けた
『演出家・佐々木智広』の集大成、世界観的には
世界でも高い評価をされる日本のマンガ・アニメといったサブカルチャーと、イギリスが生んだ偉大な作家
『シェイクスピア』作品との融合。昨年はイギリスにて16日間のロングラン、日本でのイベント、演劇祭などで上演。その結果、エジンバラの新聞・批評サイトなどから最高評価の5つ星を受け、なぜかイギリスで、日本よりも高い評価をいただく。海外において、日本語上演でも評価された作品とはどんなものなのか? 観ている人の五感を刺激し、奏でる音楽が言葉となり、パフォーマーの動きが物語る、Afro13の世界観。

「これは演劇ではないですよ
ね…」と言われたAfro13の自信作!『Death of a Samurais』ぜひあなたの五感で体感してみてください。



アジアの記憶がお互いの声や身体を通して響き合う。
13地域からの表現者を迎えて、
第5回Asia meets Asia 2005、待望の開催へ。

第5回 Asia meets Asia 2005

期間: 2005年10月17日～23日

会場: 麻布die pratze(公演)/
プロト・シアター(シンポジウム・ワークショップ)

◆参加劇団>★Exile Theatre (Afghanistan)
+Bond Street Theatre (USA) ★Bishkek City Drama Theatre (Kyrgyzstan)
★Sovanna Phum Company (Cambodia)
+ Integrated Performing Arts Guild (Mindanao)+Waterfield Theatre(Taiwan)
★"Unbearable Dream3" Asia meets Asia Collaboration Project No.4アジア8地域からのコラボレーション

☆クアトロガトス(Tokyo)☆マイマージュオペラ(Tokyo) ☆チームタバス(Tokyo)

問=Asia meets Asia 実行委員会

tel: 03-3360-6463

mail: ama1997@nifty.com

帰っちゃう。直に言葉を交し合うような実質的な交流機会は、劇団相互にも、お客様との間にもほとんどない。興行的な作品中心主義とでもいうのかな。でもそこからは、将来関係を築くような理解や信頼は生まれない。

●共に滞在するとなると、実際は大変そうですね?
大橋— 大体1週間くらい。その間にリハーサルもし、公演も1日3連続公演の日を作って、お互いに見れるようになる。お客様も体力勝負だけど、これが以外と飽きない。互いに同じような顔つきしてはいるんだけど、言葉が違う、雰囲気や身体性、音の響きが違う、でもどれも、アジアってことでどこか親しみがある気もする。
●アジアの共通性ってあるのですかね?

大橋— その昔西欧から見て、日の出る方がアジアって呼ばれて、世界で一番大きな大陸と周辺の島国っていうことで地理的に地続きだけど、そこにさまざまな民族、宗教、文化、言語が混在している。共通性より、ディスカバリー・アジア、旅行会社の宣伝じゃないけど、アジアの多様性がいい。グローバル化って言われる今、アジアのローカルなものの現れの中には、それぞれとても強いものがいる。その強さがどこから来るのか? 自然とか宇宙とかとの結びつきがまだ残っていて、だから豊かに感じられてくるのかな。批評家

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場
DIE PRATZE より最新ニュース

が演劇やダンスを論じる時、多くは西欧的な視点や言説が中心になっているけど、アジアに見られる価値をどう評価し取り入れていくか、これから課題だ。

●今回のAsia meets Asia 2005について?

大橋— おかげさまで1997年に第1回を開始し、ちょうどそれが香港返還年だったんだけど、東南アジアから南西アジア方面まで足を伸ばしながら未知のアジアを探しながら、今回で第5回を迎える。この間「9.11同時多発テロ」を経て、昨年はイスラム文化圏のイランやバングラデシュ、在欧イラク人の演劇を呼んだ。今回は、遠く離れて点在するアジア13地域から多様な表現者たち計40人余を迎える。身近にあって見えないアジア、忘却されつつあるアジアの記憶がお互いの声や身体を通して響き合う、それがどんが痛みや懐かしさ、希望を伴うのか、楽しみです。

JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die pratze
9/30(金)～10/2(日) 劇団X-tension
STAGE:3「さて、ここでクイズです」

問=070-6464-6661

○父の遺産を手に入れるため、実の弟を殺害する決心をした姉。しかしそんな姉の想惑とは裏腹に、予期せぬ殺人が! 次々と繰り出される迷推理、犯人は一体誰だ?!



◆麻布die pratze
9/23(金・祝)～9/25(日)
恩田ツバー2005「雨の日の金星人」「まだ夜日本昔ばなし」
問=090-6473-5568 (制作)
○恋する少女は明かける。朝が夜を刈り取っていく仕組みを。太陽の家出先を。恩田ツバー第1弾は東京タワーの懐で語られる、真昼と深夜の昔ばなし。



Asia meets Asia 実行委員会代表/大橋宏氏にインタビュー

●はじめにAsia meets Asiaについて教えて下さい。
大橋— 具体的には、僕らが知らないアジアの現代演劇を3つ4つ日本に迎え、そして一定期間共に滞在しながら、お客様と一緒にになって、お互いの公演を見合い、シンポジウムやワークショップをして、いわば演劇キャンプのような時間を過ごす。よく国際フェスティバルで文化交流って言うけど、でも実際は海外から来る劇団は、それぞれ別にやって来て、自分の公演したら



歓声!走る。子ども達が表現に親しんだ「ACTION!」の夏。

「ACTION! 子ども夏まつり 2005」

○7月29日(金)~8月7日(日)にしすがも創造舎

去る7月~8月の10日間、もと中学校だった豊島区西東郷のくにしすがも創造舎へ会場に「ACTION! 子ども夏まつり2005」(以下、「子ども夏まつり」)が開催されました。これは、「NPO法人芸術家と子どもたち」が取り組む、アートを通じていろいろな人が交流する場をつくりだす「ACTION!」というプロジェクトのはじめての総合イベントとして行われたものです。「五感」「生活の中のしぐさ」「街」「植物」など、日常的に慣れ親しんでいるはずのものが、多様なジャンルのアーティストや専門家によって、普段とは違う体験に生まれ変わりました。ダンス公演で幕を明け、期間中、2つの展覧会、カフェ、ならびに5つのワークショップが開催されました。会期中の延べ入場者数は地域の子どもたちを中心に900人にのぼり、かつての学び舎に子どもの歓声が戻りました。

初日のダンス公演「おはよう」から「おやすみ」まで、振付演出家、伊藤千枝のリードで、7月から10日間のワークショップを重ね、14人の子どもたちが「発明」したダンスを上演。「発明」のものは、子どもたちのふだんの一日です。朝起きてから歯を磨いて顔を洗い、朝ごはんを食べ、学校へ行き、教室で勉強をして、友だちと遊び、家に帰ってお風呂に入り、おやすみなさい、と、寝床でぐっすり…。そんなふだんの一日が、子どもたちの伸び伸びとしたアイデアでダンスに生まれ変わりました。本番の舞台は、自分たちのダンスをたくさんの人みでもらえる嬉しさも子どもたちから伝わって、大きな拍手で迎えられました。

校舎の3階では、美術家ユニット、深沢アート研究所による「五感でわくわくミニミュージアム」を開催。これは五感を使って遊ぶことをテーマにしたハンズオン型展覧会で、各感覚をテーマにした体験型作品が並びます。触覚をテーマにした「やすりの部屋」は、木片を4種類のやすりですべすべに磨きあげ、階段に設置にされたすべり台で滑らせます。とてもシンプルな仕掛けながら、とりこになってしまふ子どもが続出。その他にも、きれいな空気を味わう「ハイジの部屋」、不思議な水の映像に目を凝らす「水の部屋」、ボールの転がる音を楽しむ「パイプとボールの部屋」、触覚・聴覚を意識しつつ自由に造形ができる「ブチブチの部屋」などがあります。また、各所に配置されたインターブリータとの会話も

子どもたちが、展覧会を楽しむことに一役かっています。


もう一つの展覧会「りさ部(ぶー)てんらん会」では、美術家、さとうりさと子どもたちによる国工クラブ「りさ部」で制作した作品を活動記録映像とともに展示。入口で出迎える「おもちゃの神様」は、子どもたちが使わなくなつたおもちゃを持ち寄つてつくり、お寺で供養してもらったもの。会期中にも、お賽銭がわりのレゴが日々取り付けられていました(写真)。ほかにも、子どもたちのラクガキ200個で構成された巨大ぬり絵が床に敷き詰められた「ぬり絵の部屋」や、アルミホイルで自分で自分をかたどつてつくった等身大の人形とふとんやさんと一緒につくった綿でできたてるてる坊主が天井からぶら下がる不思議な空間「ぬけがらてるてる坊主の部屋」などがあります。

遊び疲れて2階に降りると、職員室と隣接したバルコニーには、「グリグリ・カフェ」が。「グリグリ~Greeting Greens~」は、今年の春にスタートした「緑に囲まれてうまれる、出会いと

ヒラメキ」をコンセプトとした長期的な地元交流プロジェクト。今回は、子どもたちがバルコニーで苗を植え育ててきた「ゴーヤ」や「きゅうり」などのつる性の植物がつくった「緑のカーテン」による心地良い空間を室内まで広げ、ほっと一息できるカフェをつくりました。床には蝋と人工芝を敷き詰め、大型の観葉植物が置かれた「緑御×リゾート風」の空間で、麦茶やオリジナルドリンクが飲みます。

1階に下りると、昇降口には、建築家の松野勉+相澤久美によるダンボール製の遊具「やま天国」が置かれ、疲れを知らない子どもたちは、最後のひと遊び。また、現在コレクションをはじめている絵本の一部をおひろめする「絵本コーナー」では、子どもより、一緒に訪れた大人のほうが熱心に読みふける光景も。

「子ども夏まつり」は、子どもたちの歓声につつまれて、無事10日間の会期を終了しました。秋以降には、月に1~2度のペースで、「グリグリ」「絵本コーナー」を中心に、定期的にプログラムを実施していく予定です。

(芸術家と子どもたち/宮浦宜子)

NEXT “自由の精神”を武器にサーカス一座が大冒険に乗り出す、M・エンデのファンタジー

にしすがも創造舎演劇上演プロジェクトvol.1
アートネットワーク・ジャパン+Ort-d-d プロデュース
「サーカス物語」 10月7日(金)~10日(月・祝)
○にしすがも創造舎 特設会場

頬をかけたサーカス一座を舞台に夢と想像力の大切さを謳うミヒヤエル・エンデの「サーカス物語」(1977年発表)が上演される。この戯曲に、ANの制作スタッフは「大人も子供も楽しめる地域に開いた作品を」という思いを込めている。演出はOrt-d-dを主宰する倉迫康史。出演は7月のオーディションで選ばれた20代~50代の20名。また、サーカス劇の表現を充実させるために、歌唱ディレクションを上井都希和、アンサンブル・ディレクション(ムービング、楽器演奏)を棚川寛子がそれぞれ担当。9月の稽古に先立って、8月に発声、歌唱アンサンブルのワークショップも行われたさて、演出の倉迫は次のように抱負を語る。「詩的で美しい言葉に彩られた、ファンタジックな作品。サーカスらしいけれどもたっぷりです。もと中学校の体育館という自由な空間をいっぱいに使って、サーカス小屋を作り、歌、踊り、動きのアンサンブルを駆使して暖やかで幻想的な作品にしたいですね」と言っても、ディズニーのように楽しい

だけで影のないファンタジーではありません。人間の心を麻痺させ、荒廃させる現代文明の影の部分を描いてるのがエンデらしいところです。彼が最も大切なとを考えていた“自由の精神”“遊びの精神”を、表現に携わるものとしてしっかりと受けとめ、豊かな遊びの時間を皆で共有できれば、と考えています。戯曲はとある工場地帯のはずれの空き地から始まる。かつてこの場所にあったサーカスの残党の芸人たちが、今、所在なげに集まっている。みな行き場がなく、やがて夜も更け、一人のピエロが、一座の少女のために《明日の国》という理想の国の王子と姫の恋物語を話し始める。——すると舞台は《明日の国》へ。しかし、そこでは巨大な毒蛇モヤ魔物たちが、王子の恋を妨害して國の支配を狙っている。そこで、《明日の国》を救うために、空き地のサーカス芸人たちが空想の世界に入って行く。戦争状態の《明日の国》を救うギミックとは、現実を生きている芸人たちの強い愛と想像力なのだ——。王子と姫の恋の行方は、そしてサーカス小屋は復活できるのか。廢校の体育館という、にしすがも創造舎ならではの魅力的な空間で、深い感動に満ちた冒険ファンタジーの世界を、ぜひ、楽しもう。

TINY ALICE / NPO ARC

新宿区新宿2-13-6 光庭ビルB1 tel&fax 03-3354-7307
http://www.tinyalice.net tokyo@tinyalice.ne.jp

9/3(土)~9/11(日) ■ TRASHMASTERS

「TRASHMASTER SIZM」

☆作・演出=寺戸路之 ☆出演=松倉かおり 青木亜希子 上野智久 山森弘毅 伊藤あすか ○「どこにでもあることが平凡なら特別どこにあるんだろう?」ダカラ彼女ハニマエカラ去ッティッタ。ノアノモチャバコが贈る大人のお伽話、決定版!

9/5(月) & 9/6(火) ■ 中西レモン企画

「少しどした舞・踊の祭典 番半盤vol.4」
問=rero2remon@hotmail.com ☆出演=ノシロナオコ木村由 若尾伊佐子 村田いつ実 荒木志水 小杉裕美 他 ○場内に用意されているのは番半盤分の舞台。観客によって囲まれる中、一日4組の出演者が何を振り出して見せてくれるのか。少しどした舞・踊の祭典を要看チェック!

9/9(金)~9/11(日) ■ Landing zeal

「ダヴィンチの飼つた猫」 問=090-1126-0128
☆作・演出=高梨啓之 ☆出演=吉田彰宏 青井利佳 山傭明日香 老海孝蔵 菅原光太 千原 福岡青美 ○ある日ノリオが見つけたインターネット上の謎のページ。それは何かを表す暗号だった。解き明かすべきは、その暗号か? それとも人の心か? さあ、解き明かせ!

9/13(火) & 9/14(水) ■ 滅塵ノ放ソ衝動

「洞察ノ放ソ衝動vol.6」 問=090-8487-0050
☆作・演出=野和田 松本 田中若松 白井 伊藤 Jackie Job 川野真子 ○前回に引き続き今回も作品単品(13日17時と14日20時)と作品に加入するミックス(13日20時と14日17時)でお届け致します。

9/16(金)~9/18(日) ■ ネコネズミ企画

「ランドリーウォッシュ」 問=090-8503-5837
☆作・演出=ネコネズミ企画 ☆出演=今田みどり 太田幸絵 佐野敏子 高橋和美 永田亮子 広瀬香美 増本美穂 ○部内にある女性ばかりの小さな下宿屋そこで住む3人の住人と若い大家さんのお話を…と思つきや、舞台は一転謎の島へ。

9/30(金)~10/2(日) ■ 劇団X-tension

STAGE:3『さて、ここでクイズです』 問=070-6464-6661
☆作=又吉和行 ☆出演=南奈緒子 相沢二葉 関根大志 他

麻布 die pratze

〒106-0044 港区東麻布1-26-6 2F T&F 03-5545-1385

9/3(土) & 9/4(日) ■ INSECTA LAB.

「団踏踊vol.5」 問=03-5606-8766

☆構成・演出=野口暁 ☆振付・出演=桂由美子 香麗美里 中島晶子 山口智美 野口暁 ○暗闇に揺んでいく虫の羽。バタバタ、カサカサ、ブーン。グラフィック/ ダンス/ ノーテーション。動跡が描くダンス地図のユートピア。

9/8(木)~9/11(日) ■ 千里

「オレスティア」 問=03-5340-1933

☆作=アイスキユロス ☆構成・演出=渡辺光喜 ☆出演=河野泰 古賀天馬 森下真理 杉山タ 竹下かおり 高山京子 他 ○2500年前に書かれて、現存する唯一のアイスキユロスの三部作。現代の光を通して再構築される殺し、母殺しの物語。青年はなぜ母親を殺さねばならなかつたのか。

9/15(木)~9/18(日) ■ モジマヨモジマヨ

「女は二十歳で死ねばいい。」 問=048-255-7990

作=橋本篤 演出=東慎一 出演=竹島正義 橋本貴幸 横内宗隆 橋本篤 守安真司 山本昭 川久保マイ ○女がみんな二十歳で死ぬのなら…きっと平和な世の中になるハズだね。でも、早くやらないとみんな死んじゃうよ。急げ急げ!!

9/23(金)~9/25(日) ■ 恩田ツアーワー2005「雨の日の金星人」『まだら夜日本昔ばなし』 問=090-6473-5568

☆作・演出=恩田ゆみ ☆出演=小口麻美 高田翔一郎 吉田ミサイル 小松良和 久保田愛 佐々木さえりえ

9/27(火) & 9/28(水) ■ un seal Rose

『Marie Antoinette』 問=03-3784-6557

☆振付・演出=佐倉かおり ☆出演=美馬佳代子 佐藤律子 小野真理子 木村淳 佐倉かおり ○unseul Rose Dance Performance Vol.1 www.unseulrose.com

9/30(金)~10/2(日) ■ minatoxflat car

『MINATOXFLAT CAR#003「プラズマ」』 問=090-6122-6478 ☆作・演出=折笠港 ☆出演=大塚竜也 中田大地 向後信成 渡辺麻与 熊本純伸 他 ○バス停に集まる人々を軸に、天気・電波・テレビ・家族・遠距離恋愛をモチーフとして、東京タワーのふもとを麻布から発信する最新型ラブストーリー。